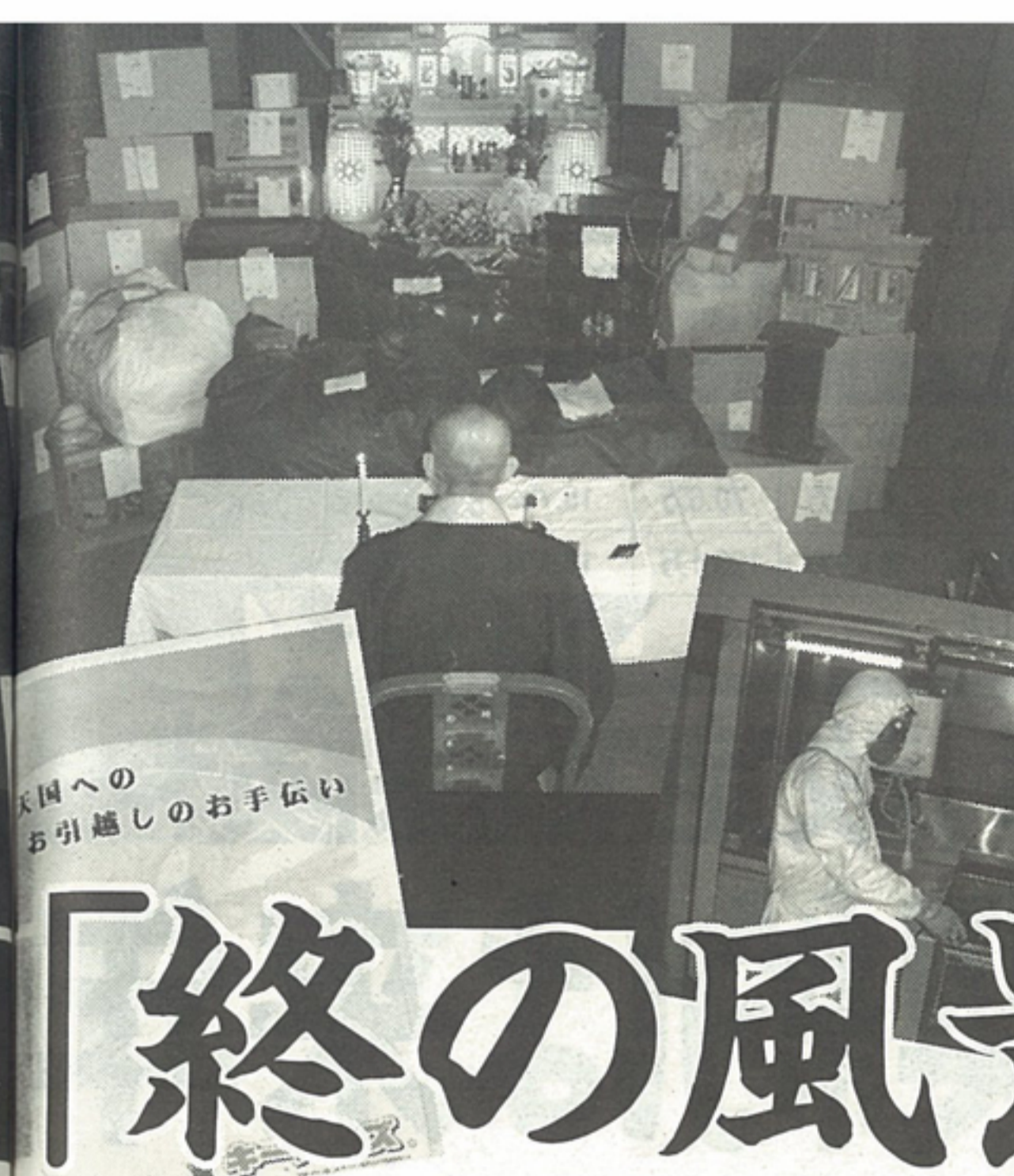


「畳の上で死にたい」とは理想の死をあらわす言葉。しかし、高齢者の孤独死が増える昨今、その実際は壮絶だ。さらには自殺、練炭での集団心中。人が亡くなった後の遺品整理を手がける業者が見た、現代日本の「終の風景」とは……もしかすると、あなたのすぐ近くに存在する現実かもしれない。



# 「終の風景」

「夏だと、普通に住宅街を歩いているだけで、「あ、この近くで誰か死んでるな」と、おいでわかります。いちいち探さないとね。仕事のときもマンションのどの部屋で死んでいるか、鼻でいたいわかる。外から見たら、ベランダの窓にハエがびっしり止まっている」

「夏だと、普通に住宅街を歩いているだけで、「あ、この近くで誰か死んでるな」と、おいでわかります。いちいち探さないとね。仕事のときもマンションのどの部屋で死んでいるか、鼻でいたいわかる。外から見たら、ベランダの窓にハエがびっしり止まっている」

「誰も手がけてこなかったサービス。遺族の方のご要望ならば何でもやります」

もともと引越し業をしていたが「遺品整理をお願いできれば」との声が多いことに着目し、4年前からサービスを始めた。今では東京・名古屋・大阪・福岡に営業所をかまへ、月150件ほどの依頼がある。

その9割が一人暮らしの老人のケース。亡くなったまま誰にも発見されない「孤独死」も少なくない。

吉田さんは仕事で見聞きした経験を、このたび著書「遺品整理屋は見た!」(扶桑社)にまとめた。吉田さんが赴く現場は遺体が撤出

された後の部屋だが、なかには目を覆うような光景もあったという。

「玄関からすでに、足の踏み場もないほどのウジで埋め尽くされていました。奥の部屋に敷かれた布団は人の形に変色していて、勇気を出してめくると、ウジの塊がウワツツと。ウジ虫のふ化場」でしたね」

そこは古い団地の一室。死後1カ月たつて発見された75歳の独居老人の部屋だった。周囲には鼻をキリで突き刺すほどの死臭が立ち込めている。吉田さんは、殺虫剤をすべての部屋にまいてウジを退治した。

「(依頼者の)息子さんは青くなって外に立ちつくしている。気合を入れてエイヤツとやるしかない」

酔って風呂で溺れ死に、長く発見されなかった人もいた。そこはまるでヘドロの海。遺体から剥がれ落ちた皮膚が、茶褐色の濁った液体の中を漂っていた。吉田さんによれば、まるで何日間も放置されたワニタン

スーブのようだったという。その浴室で、排水口の栓についているチェーンが切れているのを見たときは、さすがに寒気がこみあげた。「あの水の中に手を突っ込んで栓を開けなければ……今でもあの現場のことは思い出しますね」

別の現場では、玄関を開けたとたん、小指の先ほどに大きい、真つ黒なハエの群に襲われたことも。

「スーツから、全身すっぱりと覆う防護服に着替えて突入していったんです。あれはゴーストバスターズみたいな感じやったなあ」

死臭には慣れてる吉田さんだが、あるマンションでは、あまりの強烈なおにに、ドアの外に立っただけで腰が引けてしまいそうになった。あたりの空気が気体ではなく「固体になってしまったかのような」すさまじさだったという。

それは若者ら3人が、練炭を用いて集団心中した部屋だった。

「イメージではきれいに死

右から、故人の部屋の清掃、僧侶による遺品の供養、サービスの概要が記されたパンフレット。料金の見積もりは無料でできる

## 孤独死、自殺、練炭心中…

ねるように思えても、時間がたてばグチャグチャ……これが現実です。数多くの現場を目の当たりにしてきた吉田さんだけに説得力がある。しかし、さすがに精神的にこたえることはないのだろうか。「そりゃ、「うわっ、何や勘弁してや」って今でも思いますよ。でもね、僕らはプロ。どんなに血だらけの現場だろうと「いいですよ」と笑顔で掃除しなければなりません。僕らがやらなければ、遺族を救えるのは誰もいない。本当に困っているからこそ、心臓から「ありがとう」の言葉もいただける。こんなふうに命感さえあれば、ぐっと開き直れるんですよ」

ところで、吉田さんの本を読んで突き刺さることが二つある。まずひとつは、人のつながりの薄さだ。

同じ団地の1階真下の部屋に住む老いた父親の死を1カ月たつても気がつかなかった男性がいる。わずか

# 遺品整理のプロが見た 現代人4000人の



500歳の距離に兄が住んでいるにもかかわらず、死後6カ月たつまで誰にも発見されなかった55歳の男性も。ときどき電話の一つもかけたら……誰もがあとでそう思うのだが、なかなかそうはいかないのが現実だ。「人間、自分自身がある程度老いてはじめて、親のことを優先して考えるようになる。それまではやっぱり自分が優先ですよ。だからね、一人暮らしの親や親戚がいたら、たまには家に招いたり、一緒に食事をしてあげてください。それだけで元気が出てきて、孤独から抜け出すきっかけになることだってあると思う」

もうひとつは、孤独のうちで亡くなった人たちの惨めさだ。吉田さんは1千件を超える「孤独死」の現場に立ち会ってきたが、そのうちの約3割の家庭にはエアコンがなく、その中の1割は電話もなかったという。厚生労働省の「国民生活基礎調査」によれば、65歳以上の人のうち、一人暮らし

し割合は年々増え、05年には22%。5人に1人だ。遺品整理ビジネスの需要が高まる背景には、こうした少子高齢化があるのだが、吉田さんはこうもいう。

「亡くなったあと、天国から変わり果てた自分の姿を見下ろしたら、もう、やりきれないじゃないですか。70年、80年とさんさん苦労して生きてきて「最後はこれかいな」って。だから亡くなっても24時間以内、きれいな姿のうちに発見する方法はないか考えています。それによって商売が減ってまかまかせません」

### もしものときを 悩み続ける老人

その一環として、お年寄りに楽しみを与え、孤立しないようにコミュニケーションの場を与える活動を、会社とは別にボランティアで立ち上げる計画も練っているという。

生前に契約や問い合わせをするお年寄りも増えているとか。見積もりは無料だ。(電話番号、合ってます) ああ、これで安心して死ねます。誰にも相談できずにこの十数年、ずっと悩んでいたんです」

「まだ元気で、自分の意思で申し込める今だからこそお願いしたいんです」

吉田さんのものには、ときどきこんな電話がかかってくる。もしものときに備えて、遺書やメモに「キーパーズにたのむ」などと書き記した人の話も、これまで10件以上耳にした。

「おそらく全国では1000人はいらっしやるのではないでしょう」

誰もが避けて通れず、いつ来るとも知れない人生の終わり。吉田さんは数多くの「終の風景」を見てきて、人はあつげなく死ぬことを痛感しているが、人生観に変化はないという。

「まだまだ助けなければいけない方がたくさんいる。自分の死のことを思っているヒマはありません」

本誌・宇都宮健太郎